

案 1 - 財団法人高砂協会設立趣旨書

台湾開発五十年の事蹟は、世界殖民史上稀にみる精華として、つとに内外の認むるところである。

この事蹟は、台湾引揚四十万同胞が、かつて父祖三代に亘り官民相協力心血を注いで、その開発興隆に貢献した努力の結晶である。

然るに、今次大戦の結果は、その墳墓の地であり生れ故郷でもある台湾を失い、五十余年の間営々蓄積した有形、無形の財産一切を失って引揚げざるを得ない結果となったのである。

これらの人々は在台多年その大半は既に老境に入り、最早心身ともに疲労困憊して再起不能の状態にあり、その甚しきは、養老の資に窮するばかりでなく、その日の糊口にすら窮し日夜身の不遇をかこちつつある実情を耳にすると、うたた惻隱の情を禁じ得ないところである。

これら同胞の中には、折角将来を嘱するにたる有為の子弟をもちながら学資の支給困難なため進学不可能となり、或は学業を途中で放棄するのやむなきに至るものもあるに至っては国家百年のためまことに憂慮に堪えない次第である。

殊に台湾引揚同胞の子弟は生来南方熱帯圏内の気候風土に育まれ熱帯生活に適応する特質と経験を有するのであるから、これら青少年に対し南方地域の開発に適する農、工その他特殊技術を修得せしめあるいは、熱帯医学に通ずる台湾二世を起用し、これを南方諸地域に送ることができれば人物利用上極めて適切なばかりでなく国策的にも極めて有意義である。

特に台湾銀行及び三和、勸銀などは、かつて台湾、南支、南洋、および東南亜諸地域に幾多の支店、出張所を有し、これらの機関に多年在勤した行員は今なお人的に極めて密接な関係があるからその知識経験を活用し今後友好の機会を得れば、国民外交の実を挙げ得ることもまた極めて容易である。

従って、かつて国家発展の前衛として、海外に多年飛躍活動した台湾引揚者を起用し往年の志気を發揮せしめ、国家再建の一翼として寄与せしむるならば、国際親善に貢献することとなり一石二鳥の成果を挙げ得るものと固く信ずるものである。

よって前述の事情に鑑み戦後十三年今尚戦争の犠牲に悩みつつある台湾引揚者の窮状を打開し、起死回生の方法を講ずるためには、国家の施策にのみ依存することなく引揚者本来の互助の精神に立脚し相互扶助の擁護対策を講じ相励まし相助け合ふことこそ真に愁眉の急といわざるを得ないのである。

このときに当り台湾開発五十余年経済界の原動力として偉大な功績をのこした台湾銀行が閉鎖機関となり、今漸く国内清算を終り、いよいよ台湾五十年の歴史を閉ずるに際し多年台銀の事業発展に協力した台湾引揚げ利害関係者の厚生、福祉を計る目的をもって公益法人設立資金として金参千萬円を寄付したいとの発表が